

日本人的対人コミュニケーション



「日本人らしさ」の研究

- 「日本人論」とは、日本的なパーソナリティを明らかにする学問的領域である
- 社会学、文化人類学、心理学、言語学、コミュニケーション学、哲学などの学問からアプローチされている
- 日本人論研究者は、日本人の特異性を発見し、他の人々との違いを明確にすることが目的



日本人論とは何か

- WWIIにおいて、アメリカは日本人研究を奨励し、日本人の強みと弱みを知るために、多額な研究費を社会研究者に提供した
- 「菊と刀」で有名な文化人類学者Ruth Benedictもこうした研究者の一人



日本人論の特徴は

- 日本人の異質説を肯定
 - 異質であるからこそ日本人は特別であると思える
- 異質性が日本人同士の一体感や特別意識を生み、その他の民族と一線を画すことができ、国民的プライドが保てる
- 実は「甘え」という概念は中国でも韓国でもある
- 日本人論の代表例は濱口、中根、土居である



濱口恵俊の「間人主義」

- 日本人は人と人の「間柄」を大切にし、相手との関係によって行動様式を大きく変える
- 日本人を理解するには、個人に焦点を置くのではなく、人と人の関係性が重要
- 他人は「物」として見なし、失礼に扱う一方、身内に対しては自己犠牲を惜しまずに行う
- こうした2重基準による対人行動が特徴的
- 例えば、電車内で席を譲る場合



中根千枝の「タテ社会論」

- 日本人はタテの関係を重視し、上下関係を明らかにする傾向がある
- 例えば、学生間の先輩後輩の序列は中国人には見れない
- 個人の達成よりも、個人が所属する集団・組織の序列のほうが人の価値に結びつく



土居の「甘え」論

- 「甘え」とは特定の相手との関係において、気を遣わずに自由ありのままに、わがままを完全に許してもらえる間柄に存在する現象のことである
- 甘えとは自己中心的に行動し、相手の好意を当たり前前に思うことである
- ごく親しい間柄では、日本人は甘えるが、少しでも疎遠であれば遠慮し、礼儀正しく振舞う



米山俊直の「仲間論」

- 日本人の人間関係は4つの層からなる
 - 身内
 - 仲間
 - 世間体
 - 他人
- これらの層によって、対人行動は異なる
- 身内と他人には遠慮がないが、仲間と世間体には遠慮が必要



伝統的日本人らしさ

- 集団主義的
- タテ社会
- 他者志向性
- 自己卑下
- 父権社会
- 集団アイデンティティ
- 内集団・外集団の区別



日本と西洋のプレゼンテーション法

日本人

間接的

非主張的

面子の維持

円形な思考回路

非言語行動中心

遅い敬意を表す話し方

聞き手中心

西洋人

直接的

自己主張的

面子の挑発

分析的な思考

言語行動中心

早い説得的な話し方

話者中心



日本文化を代表する言葉

- 遠慮
- 自己卑下
- 一心同体
- 腹芸
- 甘え
- 宜しく申し上げます
- 満場一致
- 察し



日本人は本当に独特なのか

- 国内外の研究者は、日本人は特異な存在であると主張している
- ところが、実証的研究の多くはそのようなことを確認していない
- 時代の変化やグローバル化によって文化は変動する
- グローバリゼーションは文化を収斂させ、世界の文化が統一になりつつある＝アメリカナイゼーション



日本人論の歴史的発展

- 日本人論の発展的段階
 - 段階 I: 敵国の精神の究明期
 - 段階 II: 経済大国化の期
 - 段階 III: 日本的不敗神話の崩壊と特殊性を問う期
- 日本人論の展開
 - 文化的前提の批判的再考
 - 文化的相違性ではなく、類似性への注目
 - 新たな、より現代的日本人論の必要性



なぜ日本人論は古いのか

- 80年代半ばに新人類が出現—経済的豊裕化が個人主義を助長させる
- 90年代には日本経済の不敗神話が崩れ、日本人の特殊性が否定され始める
- 日本人の民族的プライドは低下し、自ら日本人らしさのすばらしさを感じなくなり、興味を失う
- 終身雇用制が廃止され、個人主義化がますます進む



日本人論の実証に失敗した研究

- 特に最近の研究の多くは、日本人論が主張する日本的とされる特徴を確認できていない
- 日本人は、西洋人と同等あるいはそれ以上に「西洋的」であることが判明している
- これは文化変動によるものなのか？
- それとも日本人の被験者が日本人を代表していないのか
- それとも研究方法に問題があるのか

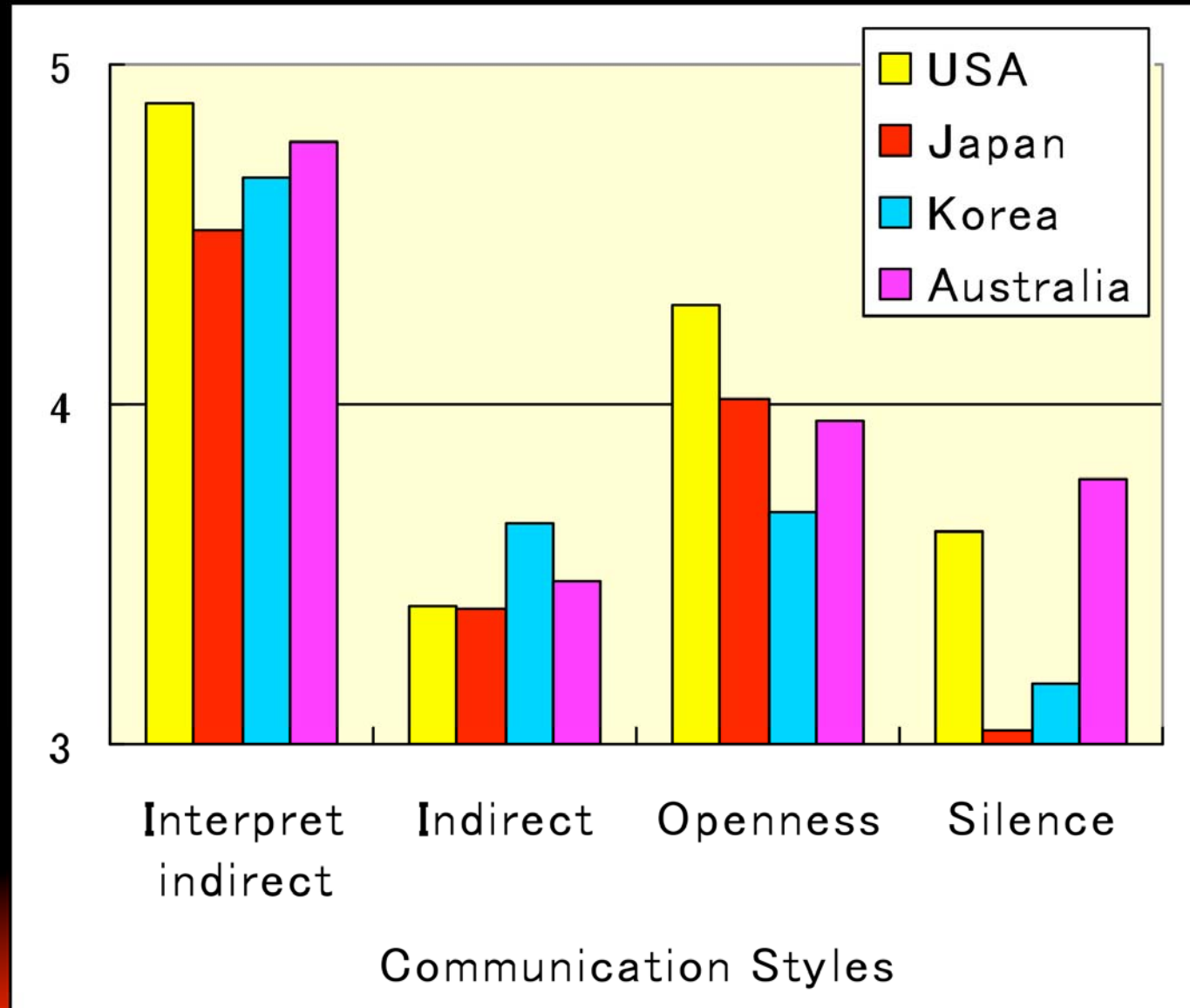


Gudykunst et al. のコミュニケーションスタイル研究

- コミュニケーション・スタイルの日韓米豪の比較
- 間接的コミの解釈、対人感受性、間接的コミ、ドラマチックなコミ、感覚的コミ、オープンなコミ、コミの正確性、沈黙のスタイルを比較
- 日韓が集団主義文化、米豪が個人主義文化
- 集団主義＝間接的、曖昧、察し中心なコミ
- 個人主義＝直接的、オープン、正確なコミ



Gudykunst et al. (1996) study

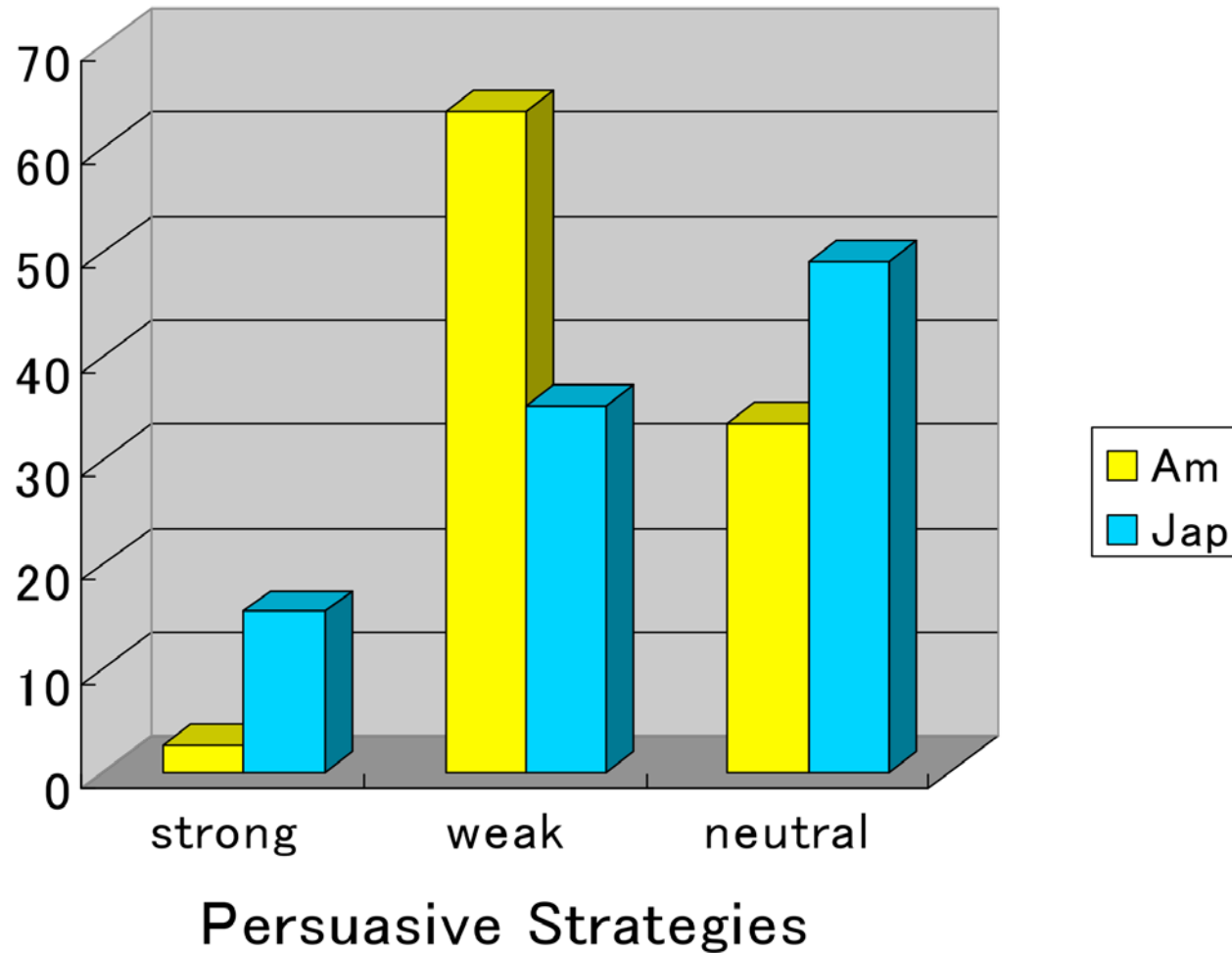


Dunn & Cowanの説得方略の研究

- 女性を対象に、依頼の状況による説得方略の日米比較を行った
- 「強い」方略とは、直接的で強引なコミュニケーションで、権威主張、脅迫、命令を含む
- 「弱い」方略とは、間接的で消極的なコミュニケーションで、婉曲的示唆、欺瞞、態度で示すを含む
- 「中立」方略とは、直接的で冷静なコミュニケーションで、明確な依頼、依頼の背景の説明など



Dunn & Cowan (1993)の説得方略



その他予想外の結果を出した研究

- Triandis et al. (1988) 集団同調性 日<米
- Neulip & Hazelton (1985) 直接的説得 日>米
- Miyamoto-Tanaka & Bell (1996) 曖昧性 日=米
- Steil & Hillman (1993) 直接性 日=韓=米
- Gudykunst, Nishida & Yang (1988) 自己モニタリング
日<米
- Gudykunst & Nishida (1985) 非言語コミュニケーション
の直接性 日>米
- Gudykunst & Nishida (1985) 歩調合せ 日<米
- Sugimoto (1997) 謝罪の直接性 日=米



なぜこのような結果になったのか

- 日本人は個人主義化した(国際化)？
- 被験者は学生であり、学生は個人主義だから？
- 日本人論は妥当ではなく、美化された日本文化を主張しているに過ぎない？
- 研究方法に問題がある？



① 日本人は個人主義化した

- コミュニケーションや交通手段による技術発展はグローバル化に拍車をかけた
- 海外旅行が庶民化・日常化し、海外の価値観を本国へ持ち込む人たちが急増した
- 海外の情報が増えると、海外の生活水準・物価水準が基本となる
 - 例えば、西洋的な家が普及した
 - 家の構造は伝統的日本文化を築き上げてきた
- インターネットはリアルタイムで海外からの情報を入手可能とし、ネットを通じての国際通信も促進された
 - IP電話によって、海外との連絡が安価になった

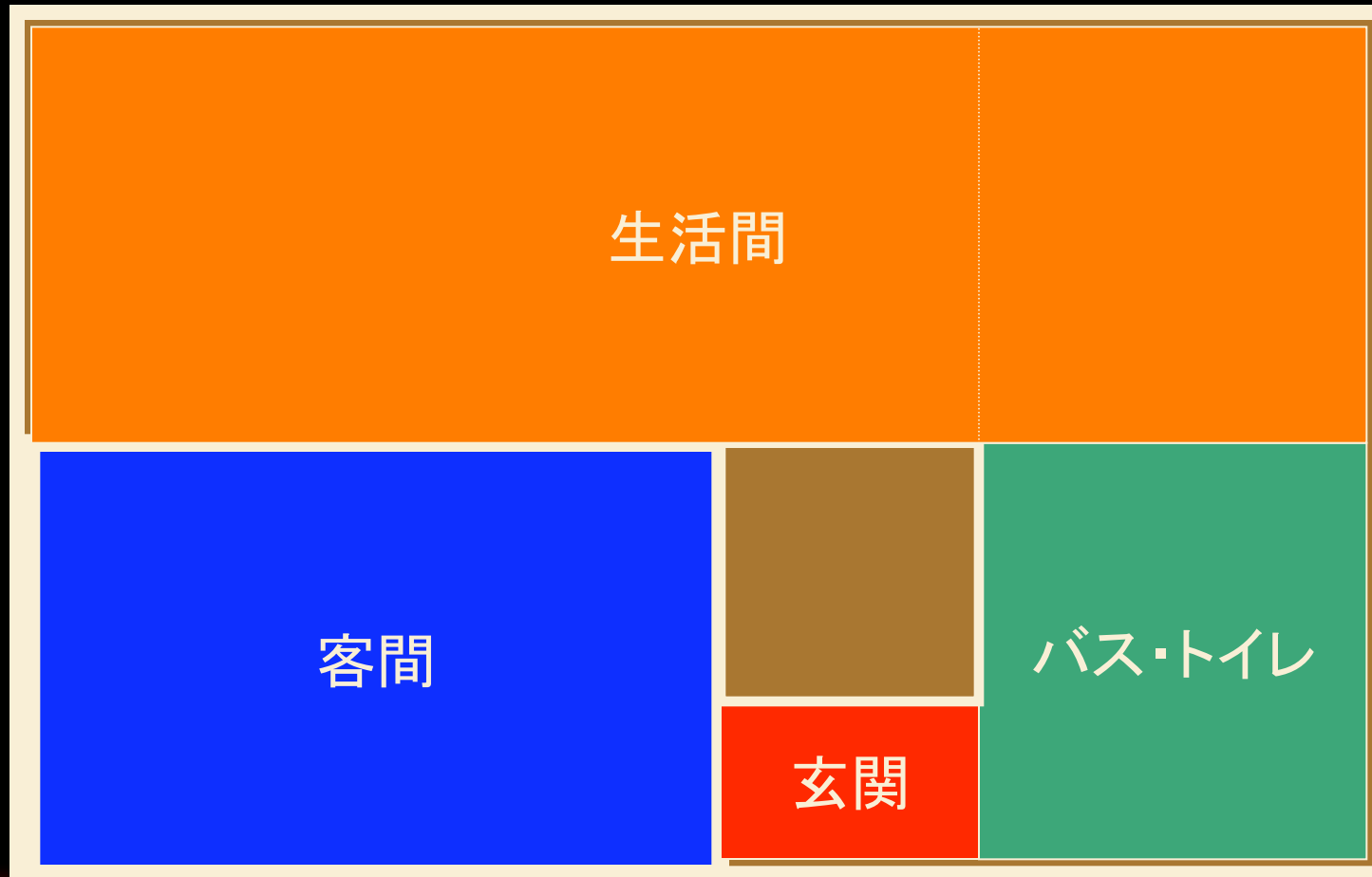


家屋の構造と対人文化の形成

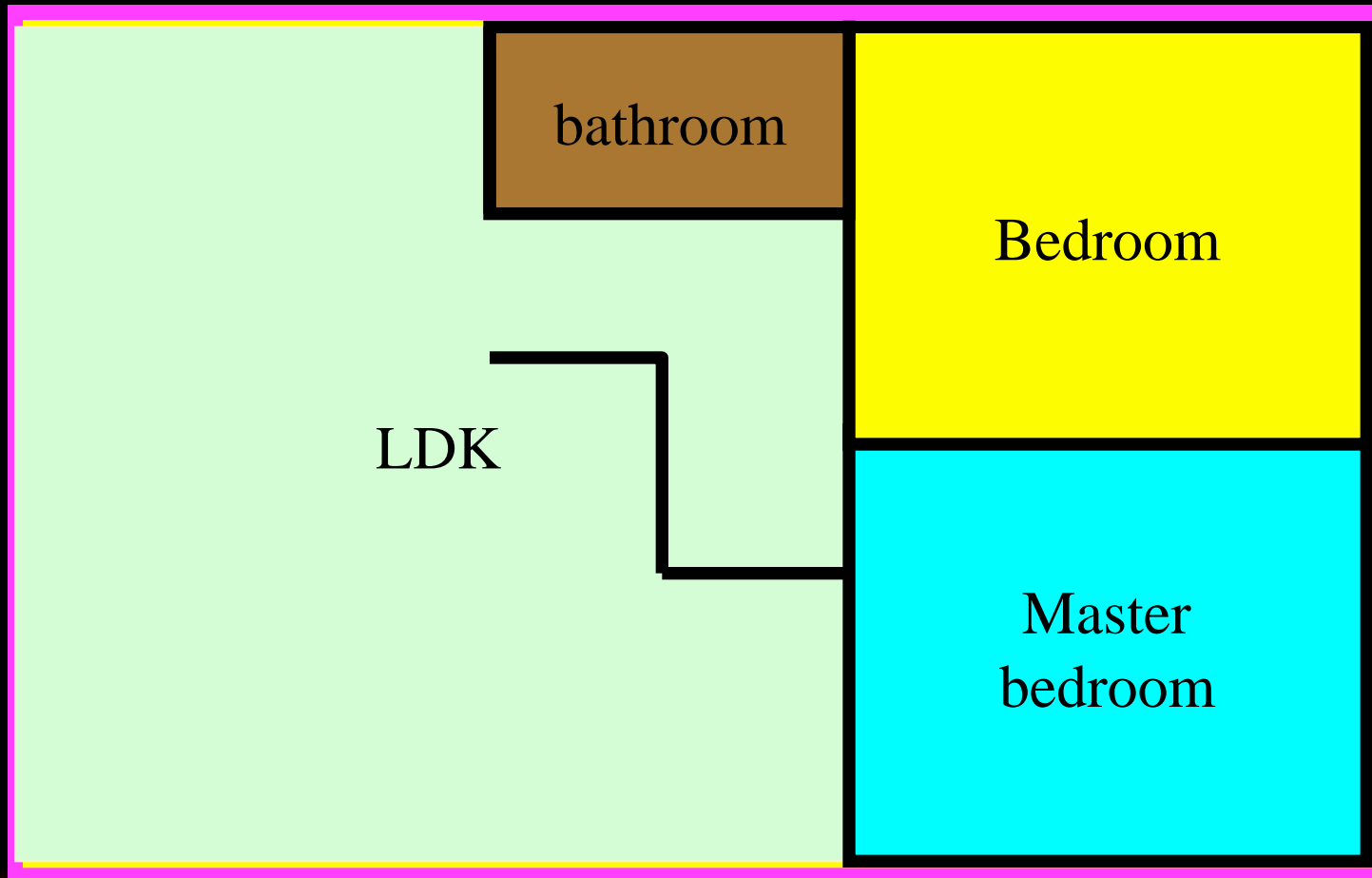
- 家屋の構造により、個人主義ないし集団主義が促進されることがある
- 伝統的な日本の家屋は個室を設けず、家族が一緒に時間を過ごすことが最大にしている構造であった一大家族との歩調合せが必要、調和された人間関係要される、家族団欒が大切
- 一方、近代的家屋は個室を設置し、家族成員は自分の部屋で大部分の時間を過ごすようになった一行動が別々、互いに顔合わせしない、個人活動が奨励



日本の伝統的な家



西洋の伝統的な家

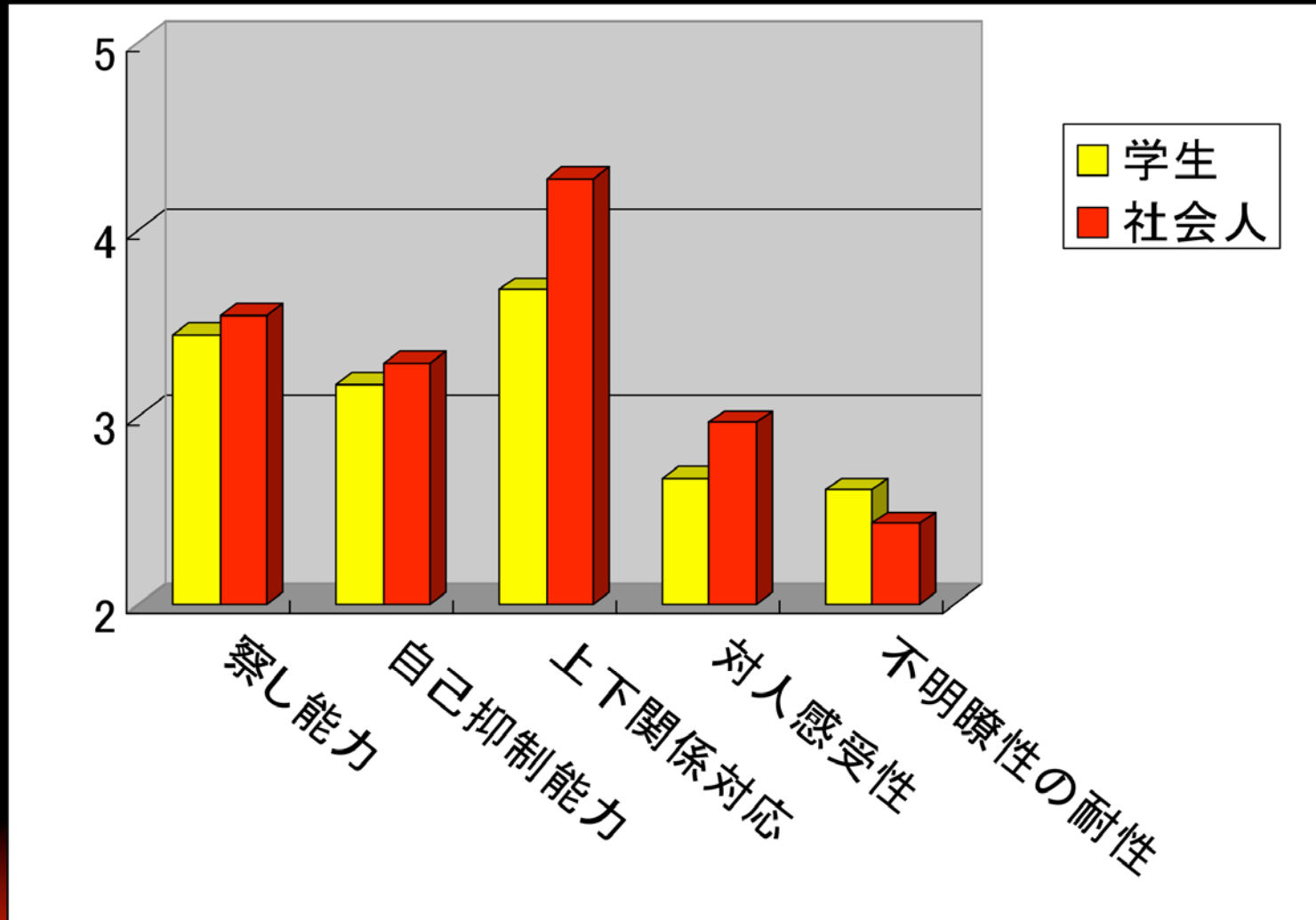


② 学生の被験者は個人主義的

- 学生が的確な文化の代表者とは言いがたい
- 学生は人生でもっとも自由のある身であるため、個人主義的になりがちである
- 学生は、文化普遍的に個人主義的であり、文化比較をやっても予想された違いが出ないのでは
- 学生はその文化における社会的経験が少なく、文化的スキルを十分に備えていない



Takai & Ota (1994)の日本的対人コンピ テンスの研究



③ 日本人論は妥当性に欠く

- 日本人論の疑問は20年前からあった
- Sugimoto & Mouer (1982) = 日本人論は学問的権威によって主張されているに過ぎず、それを裏付ける実証的なデータがない
- 山崎(1990) = 日本人は米国人と同じほど個人主義であり、両者間には相違性よりも類似性のほうが多い
- 公文(1996) = 他文化との相違性ばかりを強調する日本人論は類似性を完全に見過ごしている
- 濱口(1996) = 近代化、技術発展、グローバル化と地球規模の文化収斂が日本文化を影響し、特殊性を失った



日本人論の問題点

- 人文学的研究による、根拠を示していない、単なる学者の推測によることが多い
- 実証的なデータによる裏づけが必要であるが、それが日本人論を肯定するのではなく、否定している
- 日本人が特殊であるという前提によって研究が進められているため、見方の偏りが顕著である
- 日本の経済崩壊により、日本人は特に優れているという根拠がなくなり、日本人論に対する熱も冷めた
- 結論として、日本人論は日本文化の美化していたに過ぎない



④ 研究方法に問題がある

- 西洋的研究方法は、「要素還元主義」のものが多い
- 要素還元主義は、ある世の中の現象をさまざまな部分や成分(パーツ)に分け、特定の成分のみに焦点をあてるという習慣である
- 例えば、心理学的研究では、個人に焦点をあて、個人の周囲にある諸状況を無視している
- 日本人論は、要素還元主義でアプローチすることに問題がある



なぜ要素還元主義はだめなのか

- 西洋人は、強い自己意識を持ち、状況に関わらず、一定の自己を保ち、それを相手に尊重してもらうために働きかけ、自ら行動を調整しようとしな
- 一方、日本人の行動は、①相手によって、②状況によってかなり異なる
- 要するに、関係性と状況依存的な特徴こそ、日本人論が主張していることである
- その具体例は、英語の I と me に相当する単語—私、僕、俺、自分、小生、わし、おいら、俺様、あたし、あたい、うち
- 自己を記述する単語がこれほど多くあるのは日本語のみ
- 西洋は、関係性・状況普遍的に行動していることを前提に
- 西洋的手法である要素還元主義は、こうした状況要因に無関心



関係性や状況に影響される心理的特徴

- 自己呈示—どのような自分を相手に提示するか
- 自己開示—どの程度相手に話をするのか
- 役割規範の認知—相手との役割期待やコミュニケーションの期待の認識
- コミュニケーション記号解読—相手のメッセージをどう理解するのか
- コミュニケーション記号化—どのようなメッセージを構築するのか
- 感情抑制—状況に応じて感情を制御する



日本的関係性の4水準

- 身内＝気のおけない関係、遠慮無用、甘え
- 仲間＝親密ではあるが、ある程度の遠慮が必要
- 世間体＝親密ではないが、気になる関係、遠慮が最大、礼儀作法が大切
- 他人＝遠慮無用、その場かぎりの出会い、気遣いが不要



状況の要素

- 地位関係（例えば上司・部下、先輩・後輩）
- 公式性
- 利害関係（win-lose vs win-win）
- 関係性の今後の持続性
- 状況の緊急・緊要性
- コミットメント・関与度
- 相互影響力



実証的な研究方法は可能なのか

- 状況普遍的な、グローバル個人の特徴を探るのではなく、特定の相手と状況で規定すべき
- 関係性を規定する(親密性、地位格差)
- 状況を特定・限定する
- 研究デザインとして3要因が最低必要
 - 親密性(親密、疎遠)
 - 地位格差(地位上、地位同等、地位下)
 - 特定の状況

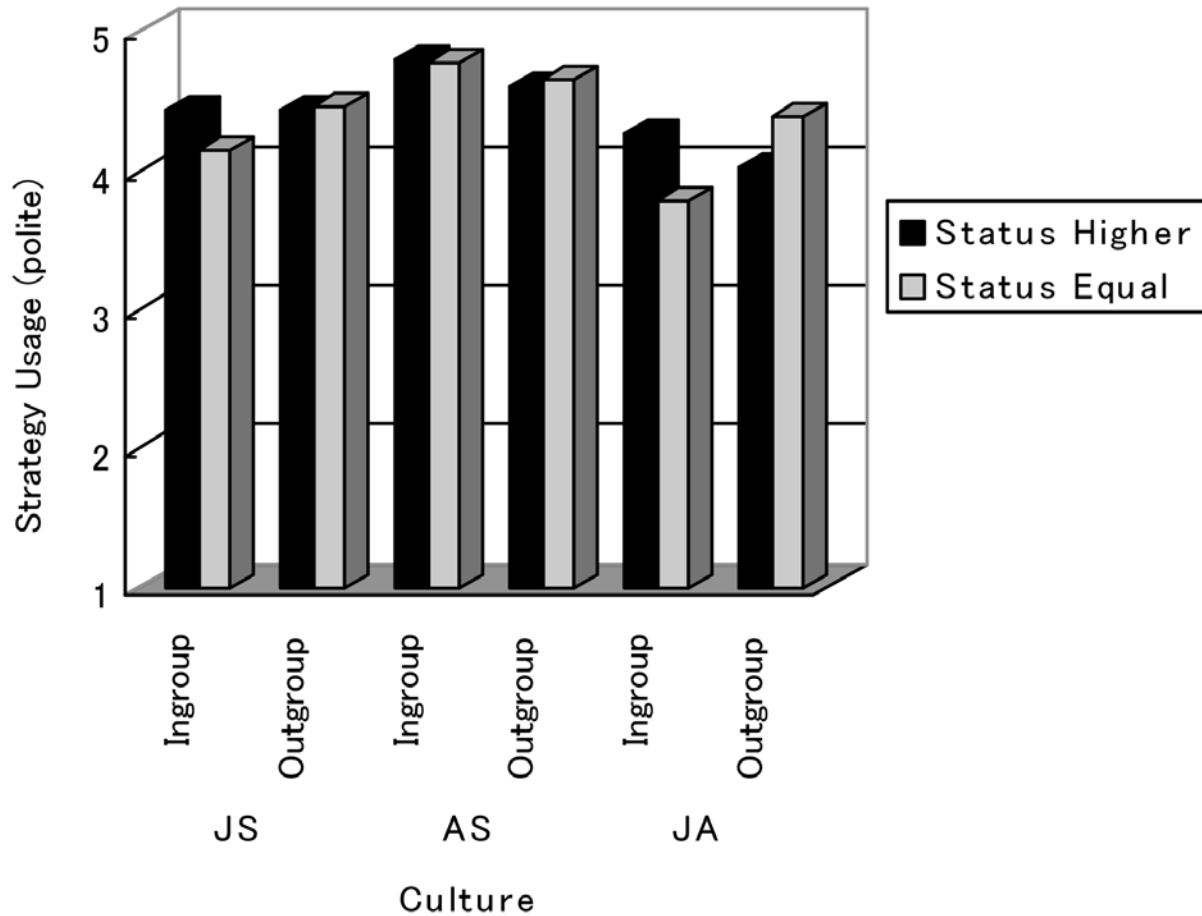


3要因を規定した研究の例

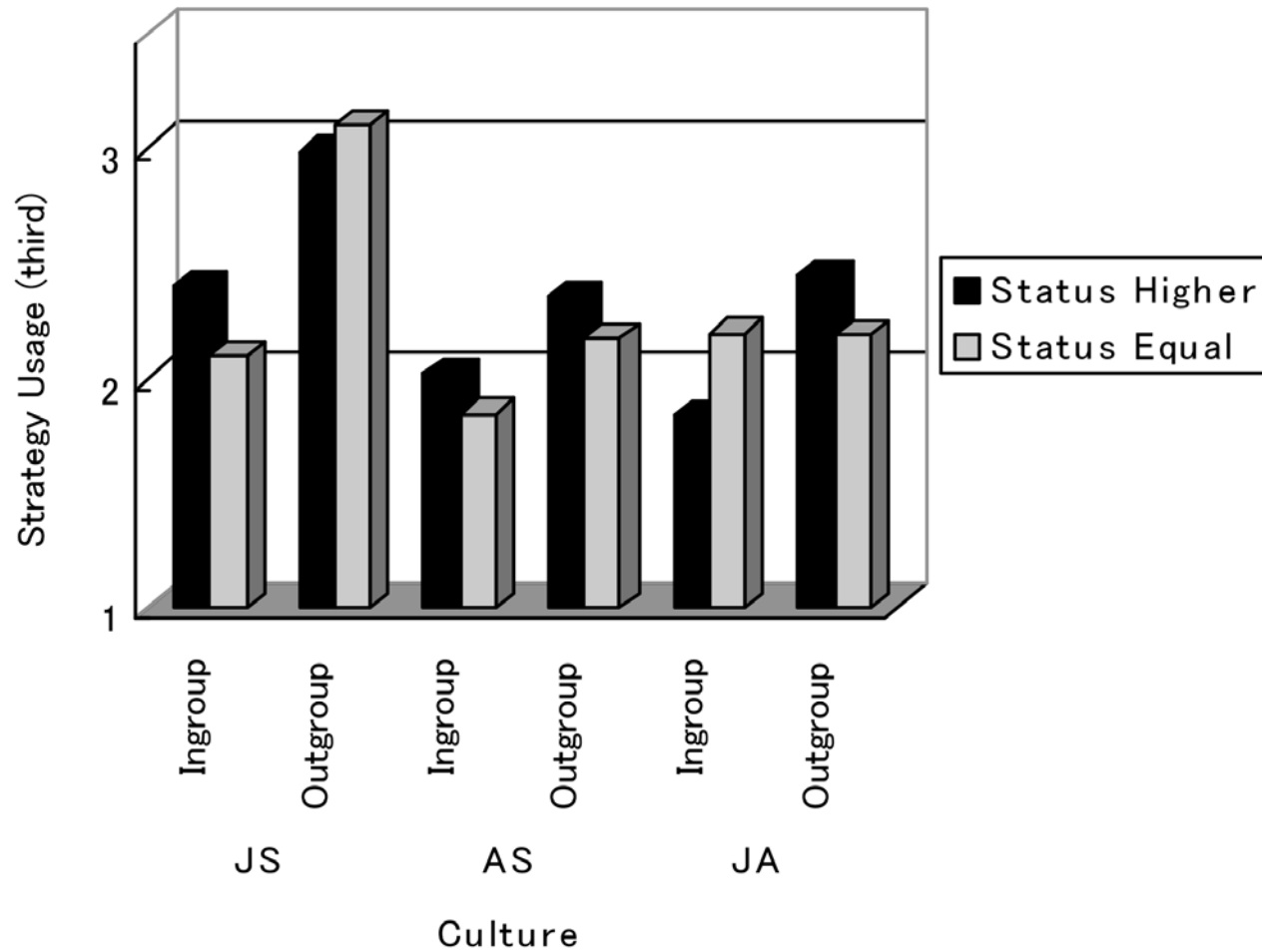
- 対人コミュニケーション方略の日米比較
- 2x2x6の実験デザイン
 - 2 = 親密、疎遠
 - 2 = 地位上、地位同等
 - 6 = 批判、依頼、断り、助言、謝罪、自己主張
- コミュニケーション方略は6つ
 - 率直、丁寧、間接、第三者、煽て、回避



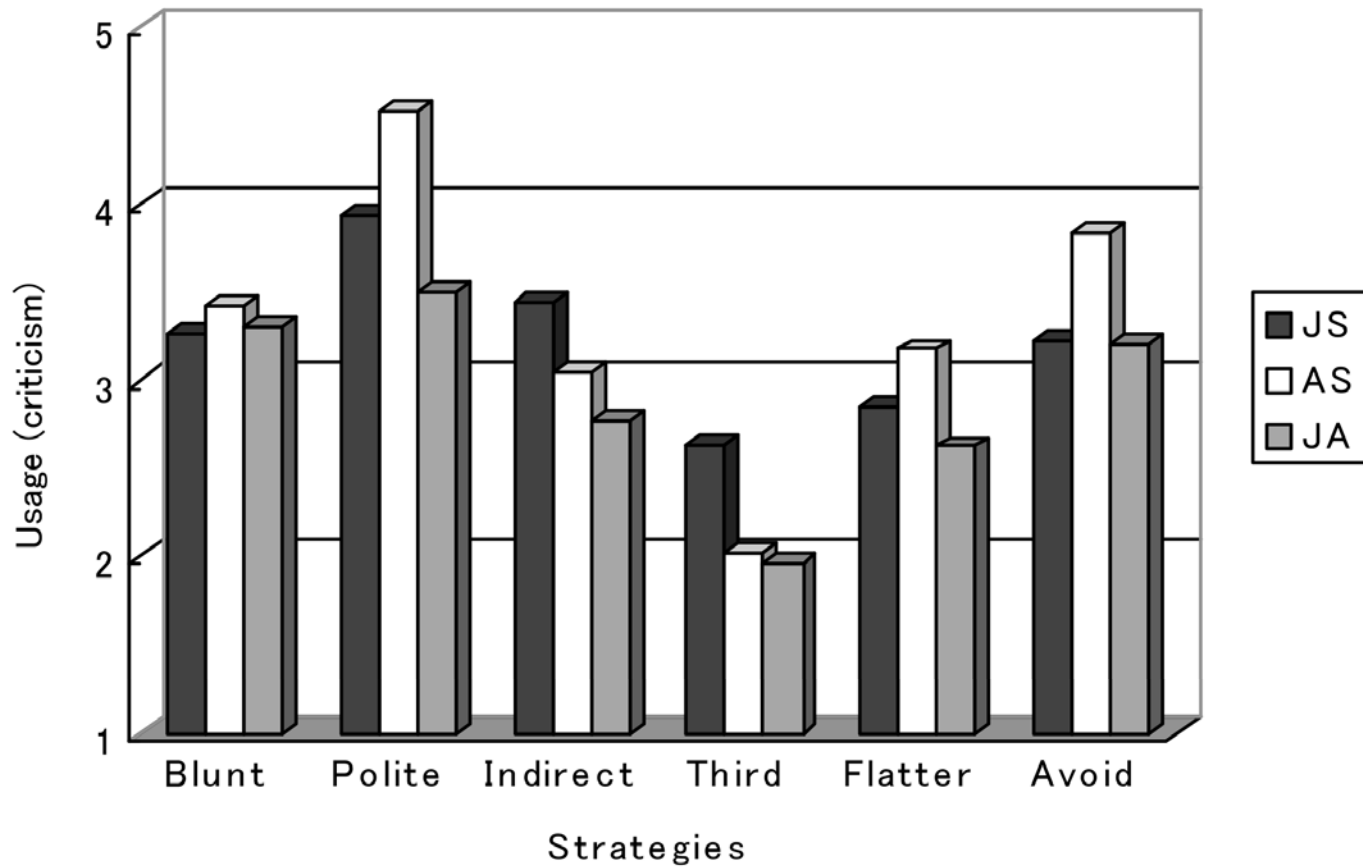
地位と親密性：丁寧方略



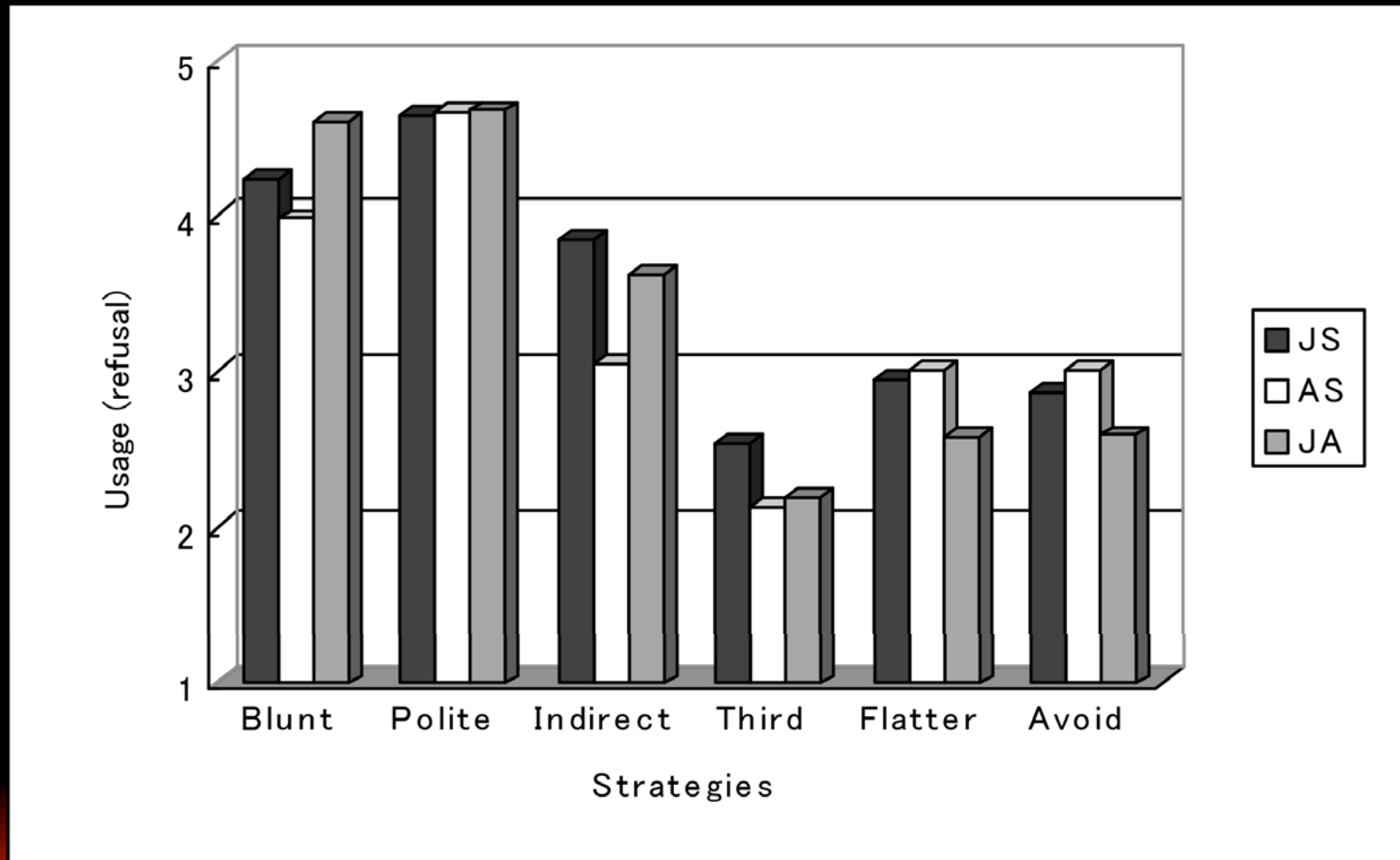
地位と親密性：第3者方略



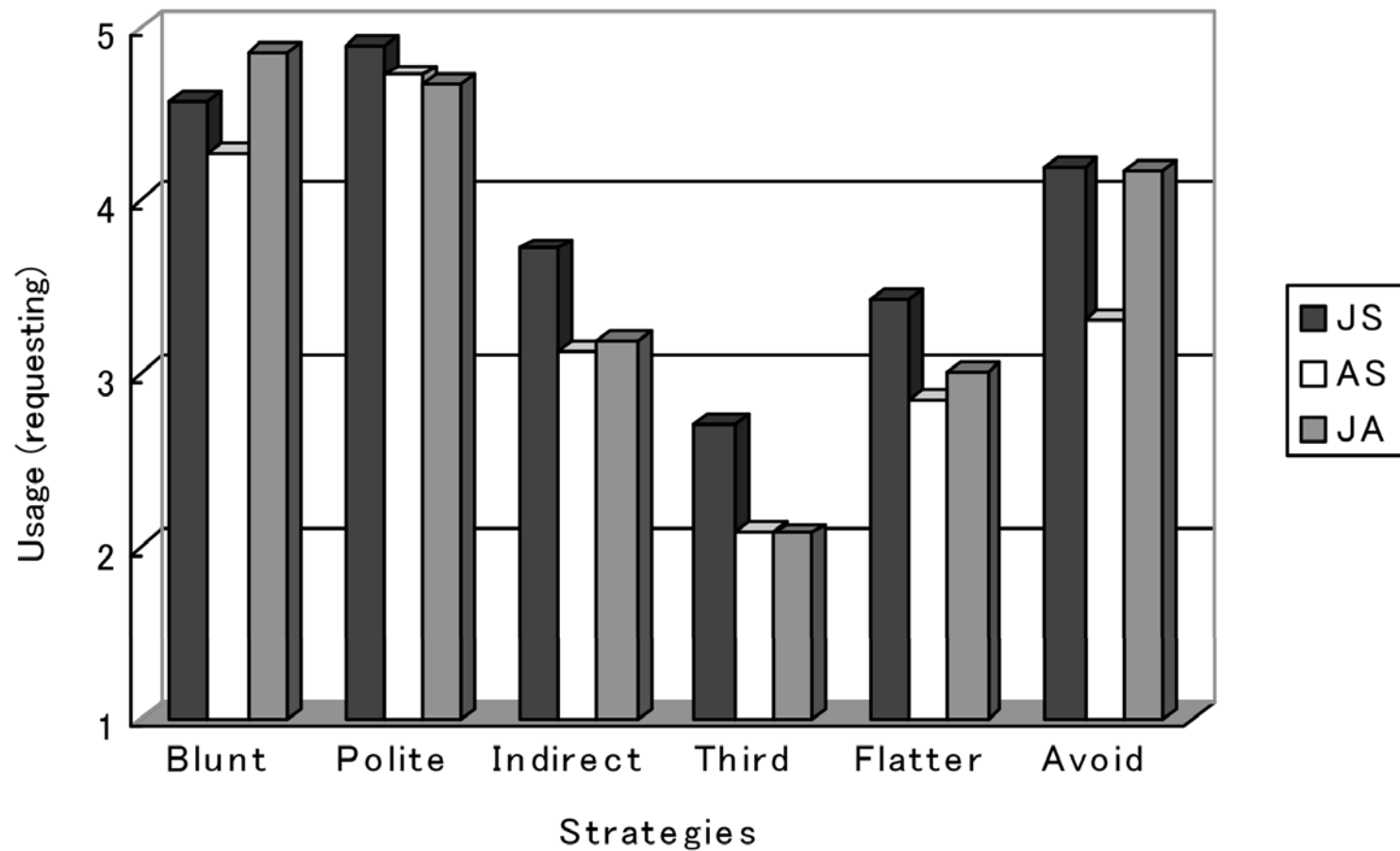
状況の規定：批判



状況の規定：断り



状況の規定：依頼



結論

- 日本的な特徴を明らかにしたければ、従来の要素還元主義の研究法では不十分
- 要素還元主義的方法を活かしながら、状況や関係性を規定することにより、「日本的」は確認できる
 - 実証的な手がかりが得られ、従来の日本人論を支持する
- しかし、日本人論で主張されているほど明確な特殊性は確認できない
 - 日本人は確かに変わった可能性が濃厚
- 学生は、文化にこだわらず普遍的な特徴があるように思える
 - 日米学生は類似している一方、社会人は異なっていた



まとめ

- 日本人論は時代錯誤というのは、正確ではない
- 日本人には、日本人に向けた研究法があり、西洋の学問的バイアスに注意しなければならない
- 心理学やその他の分野は、このことに気がつき、より正確な研究を実施すべきである
- 西洋の学問的潮流に従う必然性はなく、日本の行動科学研究者は日本独自の理論を築き上げるべきである

